葛飾図書館
友の会通信

第15号
2012年3月1日（木）
葛飾図書館友の会
編集　広報委員会
発行責任者 中里　隆二

イベント委員会主催「千代田区立 日比谷図書文化館」見学会開催

特別室で説明を聴く

読む・調べる・学ぶ・楽しむ・交流する・創造する…
都会のオアシスに“知の拠点”が誕生！

日比谷公園の南端に位置する都立日比谷図書館が、最先端のコンセプトをもつ千代田区立≪図書文化館≫としてリニューアルされました。２月１８日（土）イベント委員会主催の見学会に多数の友の会会員が参加し、新図書館内部を担当者のご案内で閉架書庫を含め全施設を見学することが出来ました。

日比谷公園といえば、明治３５年に開園された日本最初の１６万平米のヨーロッパ型の公園。東京都のオアシスといわれ、当初は軍用地でしたがその後政府による記念祝賀会、国葬などの開催地、大正デモクラシーの時代には民衆運動の拠点、戦後は米軍による接収解除後、日比谷音楽堂・日比谷図書館の再建・公園の整備を経て今のかたちになりました。しかし昭和４６年には沖縄返還運動デモの際、カレーライスで有名な老舗松本楼が火炎びんで全焼するという事件もありました。戦後の都立日比谷図書館はまだ都内の公立図書館が整備されていない時代の知の拠点としてたくさんの社会人、学生、児童が押し寄せる名門図書館でした。

『図書空間』、『展示空間』、『交流空間』という≪知の拠点≫

階	施　　設
１Ｆ	入口（コンシェルジュ）、**常設展示室、特別展示室**
２Ｆ	総合カウンター、**パープルゾーン、オレンジゾーン**
３Ｆ	閲覧スペース、**ブルーゾーン、グリーンゾーン**
４Ｆ	**特別研究室、小ホール、会議室Ａ、会議室Ｂ、交流支援室**、事務室
B1F	**大ホール**（日比谷コンベンションホール）**レストラン**

今回はそのイメージを一新、巨大ビジネス街、官庁街を背景に建物の外観はあまり変えず正３角形の内部は＜図書館サービス＞を継承しています。ビジネス支援やアート情報支援など幅広く資料を提供するかたわら、旧千代田区立４番町歴史民俗資料館の機能を移管。千代田区の郷土資料と歴史を伝え、講座、セミナー、シンポジウムなどを交えた区民、在勤、在学者への市民サービスを提供する現代の図書館としてよみがえりました。

館内の特徴としてまず、カラーで収蔵図書の大まかな分類を表しています。

□２Ｆ**パープルゾーン、オレンジゾーン**＝～まちづくりと情報・交流～「新聞・雑誌」「まちづくり」「ビジネス」「キャリアデザイン」「情報メディアコーナー」「駿河台文庫コーナー」など。□３Ｆ**ブルーゾーン、グリーンゾーン**＝～教養と創造・学び～「アート」「カルチャー」「文学」「科学技術」「ライフスタイル」のカテゴリー。大ホール、小ホール、会議室は相応の拡声、投影・オーディオ装置が完備されており、すべて有料ですが、利用者には好評とのこと。

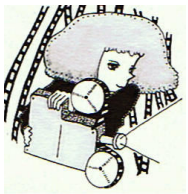
中世末～１６世紀の古地誌と航海誌が手にとってみられる！

明治の高官が収集した１６世紀世界の驚きの古書が手に取れる「特別研究室」がすごい。貴族院議員にもなった逓信官僚、内田嘉吉（うちだ・かきち）が収集した外国語図書が７０％も占める中世末～１６世紀の古地誌と航海誌を網羅する大叢書１６，０００冊。いまならインターネットで世界中の情報が集まりますが、当時の国家戦略、植民地経営にとっては貴重な情報源であったに違いない。研究者、といっても一般社会人でもゆっくりと手に取って眺めたり研究したりすることが出来る特別室。この図書館はこども、ジュニアを対象にはしていないのも都心の特徴かも。

今回は＜図書館もどんどん変わる＞という体験が十分味わえた見学会でした。（取材／高橋）

みにきて、ききにきてよかった？！『友の会』主催イベント

今後の名画・名曲のラインナップ



「ナイトシアター委員会」「１６ミリフイルムを楽しむ会」「CD・DVD コンサート委員会」及び中央図書館が予定しているイベントは次の通りです。なお都合により変更があるかもしれませんので、事前に友の会発行のポスターやチラシ、または中央図書館友の会担当者にお問い合わせください。（入場無料、いずれも会議室１、先着１００名まで）

○ナイトシアター委員会（毎月 第２土曜日の午後６時から上映）

３月１０日	『ブタがいた教室』	１０月１３日	『さよなら子供たち』
４月１４日	『嵐が丘』	１１月　３日＊	『別れの曲』
５月１２日	『甘い生活』	１２月　８日	『４分間のピアニスト』
６月　９日	『道』	１月１２日	『蟹工船』
７月１４日	『せんせい』	２月　９日	『にごりえ』
８月１１日	『父と暮らせば』	３月　９日	『美女と野獣』
９月　８日	『TOMORROW 明日』		

＊友の会ウィークのため第１土曜

○１６ミリフイルムを楽しむ会（偶数月 第３土曜日の午後２時から上映）

４月２１日	『蟹工船』	８月２０日	『アニメ　ビルマの竪琴』
６月１６日	『襤褸（らんる）の旗』	１０月２２日	『黒い雨』

○CD・DVD コンサート委員会（原則毎月 第４日曜日の午後２時から）

３月１１日　森鴎外訳　オペラ「オルフエウス」（グルック作曲 全３幕）ＤＶＤ上映
４月２２日　“春”に因んだ名曲（仮題）
５月２７日　吹奏楽・管楽器中心の名曲特集（仮題）

○中央図書館映画会（奇数月 第４土曜日の午後２時から）

３月２４日　『裸の大将放浪記』　５月２６日　『BABEL バベル』

友の会だからこそ、本との出会いを楽しむ （キーワード読書会報告）

自分ではまず読まないジャンルの本が紹介されたり、なつかしい本との再会もある楽しいキーワード読書会。２ヶ月に一度の開催で、すでに１１回を数えます。参加するみなさんの知識や造詣の深さにはいつも感嘆するばかり。今回はこれまでのキーワードをご紹介します。

記念すべき第１回目は２０１０年の５月でテーマは「こころ」。２回目以降は「まつり」「あらし」「はは」「幸福」「わかれ」「こども」「てがみ」「みのり」「なかま」「わらい」と続きました。スペシャル企画のキーワードだった「はは」と「幸福」を除いて、ひらがな３文字がキーワードの恒例となりました。とりわけ印象深かったのは「わかれ」の回でした。恋愛などの別れの本が集まると思っていたのですが、「死」と対峙したものが多く、『日本人と「死の準備」』『人間臨終図鑑』『１５０通の最後の手紙』『白い犬とワルツを』などの読み応えのある本が紹介されました。

次回のキーワードは「みどり」。３月１３日（火）午後６時半より中央図書館会議室２で開催されます。
ぜひ「みどり」から想起されるあなたのお薦めの本を手にご参加ください。　（広報委員会）

『吉本隆明の葛飾　お花茶屋から現在まで』

お花茶屋図書館で1か月間、特別資料展示

昨年 11 月に中央図書館で開催された『第３回友の会ウィーク』イベントのひとつとして元マガジンハウス編集長の石関善治郎氏によるトークライブ『吉本隆明と葛飾』が催され反響を呼びました。また直筆原稿や著書をはじめ写真や年譜なども館内に展示されましたが、関連地図・家系図などを加えた特別資料展示が「友の会」とお花茶屋図書館の共催で２月２５日（土）から１か月間、同図書館の３階ホールで行なわれています。『吉本隆明の葛飾　お花茶屋から現在まで』とのタイトルで、彼が１９４１年末から十余年住んだお花茶屋の町の様子や生活環境がうかがえる写真も多数展示されています。開催に協力いただいた石関氏による解説パンフや図書館所蔵の関連資料も用意されていますので、ぜひご観覧ください。

イベント委員会企画　ビジネス読書会

ブルーオーシャン戦略

どこまでも広がる静かで平和な「青い海」。イベント委員会主催の読書会で取り上げた本が、その名もズバリ「ブルーオーシャン戦略」です。限られたパイを奪いあうだけの従来型のビジネスを批判してベストセラーになりました。

今回のビジネス読書会は次の要領で進めます。途中からの参加でも全く問題ありませんので、興味のある方は一緒に勉強しましょう。

■時間帯：水曜の１９：30～20：30（時間と章を幹事に確認のこと）
■場所：葛飾区立中央図書館ボランティアルーム
■書籍：チャン・キム、レネ・モボルニュ「ブルーオーシャン戦略」
中古ならネットで 800 円ぐらいで手に入ります。各自、事前に読んできて討論するという勉強の進め方です。１回に１章ずつ進めます。
■幹事／連絡先：東濃 誠（ひがしの・まこと）（携帯：080-5040－9253）
たとえば１月１８日に行った第１章のレポートは次の通りでした。

Ａ　最初にアグリーとノーを紹介

なるほど！	異論反論
旭山動物園がパンダなどの人寄せ珍獣に頼ることなく、ペンギンなど普通の動物の行動展示で成功したのは、まさにブルーオーシャン戦略だ。	本には市場参入のタイミングが書かれていないが、ユニクロがバブル崩壊時に出てきたのは、まさに絶好のタイミングだった。

Ｂ　さらに新しい論点に展開する

「なるほど」から	異論反論から
初めに「気づき」がなければ、リスクを減らす戦略もない。この本から「気づき」のヒントがもらえればと思う。	葛飾中央図書館の入館者を増やすブルーオーシャン戦略を組み立ててみるのも面白い。

２０年の歴史をもつ「としょかんふれんず千葉市」と交流

“使う、知る、そして支援する”が活動の柱

昨年１２月１５日(木)午前、「としょかんふれんず千葉市」会員の皆さん１１名が中央図書館の見学と当会との交流に来館されました。市川、すみだ、北区そして草加の“友の会”に続いて５番目です。皆さんは約１時間、２つのグループに分かれ、館内を見学した後の１時間半の交流でした。

この会は１９９１年に『千葉市の図書館を考える会』として発足。２０年間、千葉市の図書館を支援するために各方面に要望書などを提出し、図書館サービスの発展に貢献してきたという“ものを言う”歴史と実績を持つ団体。昨年５月,これまでの活動を継承し、現在の名称に変更。１０周年を迎えて千葉市中央図書館のほか、市内には分館を含め８つある図書館を“使う、知る、そして支援する”との３つの視点を活動の柱に据え、会員数は 200 名、年会費は 1,500 円。13 名の運営委員が企画し、千葉市の図書館への支援と提言や 16 ページに及ぶ会報の隔月発行、講演会や勉強会、古本市への開催・協力、そして会員相互の交流などの活動を行っています。入会手続きはイベント時や会員からの呼びかけなどで行ない、講演会の開催時は会員は無料、非会員は有料とのこと。

葛飾区立中央図書館のようなボランティアルームは千葉にはなく、また会議室も予約して使用していることなど、各委員会活動を中心とした当友の会とは性格や活動の内容を異にする「としょかんふれんず千葉市」との興味深い交流になりました。

心にのこる私の一冊 ⑩『エラスムスの勝利と悲劇』

シュテファン・ツヴァイク著 内垣啓一訳（みすず書房　ツヴァイク全集１５）

中里　隆二

理想と現実の狭間で苦闘する人間像に迫る

これで何回目になるだろう？　最初に読んだ日付を 12/17/99 と最終ページにメモってある。この年は制約と義務に明け暮れた生活とサヨナラし、残された年月をそれまでに出来なかった読書と音楽鑑賞などの趣味に費やそうとスタートした時期であった。たまたま読んでいた本にギリシャ神話、キリスト教、ローマ帝国、ルネサンス、大航海時代、宗教改革などの関連図書を読めば西洋史はある程度理解できる、との記述があった。その中でルネサンス時代に生きた人たちに興味を覚え、以後、「伝記」なるものを手当たり次第に読み漁った。このツヴァイクの本と出会ったキッカケは覚えていないが気に入って、働いていた時代に、今でいうところの“大人買い”という形で全集（全 21 巻）を会社近くの書店に注文し、一部手に入らなかった巻もあったが購入していた。今回この稿を書くにあたり改めて読んだ。

ツヴァイクはユダヤ人の排斥を狂信的に進めたナチス・ヒトラー時代の 1934 年にこの本を書いた。１６世紀に生きた人文主義者としてのエラスムスと、後にキリスト教世界を二分することになる“行動の人”マルティン・ルターとを対比する。理性と狂信との戦いと位置づけ、冷徹な視点で辿り、宗教“革命”に対し中立を保つ、不偏不党を維持しようとするエラスムスの偉大さを見事に描いている。勿論、訳者の力もあるが、心に染み入る文章が溢れでている。

彼の一言が期待されている重要な時である事を認識しながら、“個人的な弱さ、救いがたい無気力のために、決断を怠った”として、ツヴァイクは彼の限界を「悲劇」として提起する。人文主義を信じる人間による世界平和と理想をペンにより問いかけながら、行動を起こさなかったエラスムスの勝利と敗北の過程を今度はいつまた読むのだろうか？

（なかざと・りゅうじ　広報委員長）

「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイディアを少しずつ実現してみませんか？

毎月第３土曜日の午後１時から４時まで中央図書館内で、また従来通り友の会開催イベント時に直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員は 1,000 円、賛助会員は１口 2,000 円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、２４年度年会費とご記入下さい。これから総会までの入会は次年度扱いとなります。また１口 500 円の寄付も大歓迎です。振替手数料は銀行窓口では 120 円、ＡＴＭからでは 80 円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

●問い合わせ先　中央図書館友の会担当者（打越さん、吉村さん、清水さん、白井さん）℡ 03-3607-9201

色えんぴつ

東京で一番高い山、それは雲取山だ。標高二千十七米という結構な高さで眺望もよく、日本百名山のひとつに数えられている▼そのころ、僕は一人で奥多摩・奥秩父を中心に低山を徘徊していた。退職をむかえる日が近づき、この楽しみにピリオドを打つべく雲取山の頂上でご来光を拝むプランを立て、夏の盛りにでかけたのである▼奥多摩駅からバスで鴨沢に、そして長い登山路をゆっくり歩いてブナ林を急登し、山小屋に一泊。ここで新聞記者上がりの老登山者と意気投合、小屋の主人も加わって、やまべの骨酒をどんぶりでかわす酒宴。深夜就寝。翌朝首尾よく頂上を極めて下山路に入った▼真夏のカンカン照りの岩道を駆け足で降りて行くうちにのどの渇きが急進。水筒の水がアウト▼5時間後やっと鴨沢にたどりつき、停留所でダウン。うつろな目で発見した自販機でビールを買い鯨飲三昧。意識が薄れてバスの中へかつぎ込まれたのもわからなかった。ビールは逆効果なのだ。山は下山してその目的が達せられる▼『下山の思想』（五木寛之・著）を手にしてあの時の苦しさをしみじみ思いだし、頂上に登りつめたときが目的ではない、下山を極めてこそ、ということを、喜寿目前の私の銘にすべきと思うことしきり。

（高橋広報委員）